

人権保育専門講座1

じぶん まる！ ～性って誰かに決められるもの？～



セクシュアルマイノリティの子どもたちの居場所づくり
にじいろ i-Ru (アイル)

田中 一步 さん 近藤 孝子 さん

今年度も三重県子ども・家庭局からの委託事業である人権保育専門講座が開催されています。

人権保育専門講座1は、にじいろ i-Ru の田中一步さん、近藤孝子さんに「じぶん まる！ ～性って誰かに決められるもの？～」と題して、四日市庁舎、伊賀庁舎、三重県人権センターの3会場でお話しいただきました。3回の講座に72名の方にご参加いただきました。

ご自身の生き立ちや、葛藤しながら自分自身のセクシュアリティと向き合ってきた経験などをおして、「性」の決めつけによって子どもたちを生きづらくさせてしまう危うさや、「性」は本来多様なものであるということについてお話しいただきました。



いろいろな性があることを知ってほしくて、わたしたちの経験を話したいと思います。

1 生き立ち～それを支えてきた部落解放運動～

ぼくは、1975年に生まれました。ぼくがこの世に生まれてきたときに初めてかけられた言葉は「女の子ですよ」でした。ぼくにとっては、その瞬間から女の子として生きる道が始まったのではないかと考えています。それと同時に両親にとっても女の子としてぼくのことを育てる日々が始まった瞬間でもあります。

ぼくの両親は兵庫県のそれぞれ別の被差別部落に生まれ育ちました。それぞれの生き立ちのなかで、部落差別はおかしいと思いながら育った父と母との間にぼくと二人の弟が生まれました。父と母は、「わが子たちには自分の育ったムラをすきになってほしい。部落差別のおかしさをちゃんと知ったうえで、差別に負けない人、差別を許さない人に育ててほしい」という願いをもってぼくたちを育て

てくれました。ですから、よく差別をなくすための集会や学習会に出かけては、帰ってくると必ず聞いてきた話を教えてくれました。

母から聞いた話のなかで、今でもよく覚えている話があります。小学校の低学年のころのことです。集会から帰ってきた後、いつものようにぼくの前に母が座りました。そのとき母は、「今日は結婚差別に遭って命を絶ってしまった女性の話を聞いてきた」と話してくれました。その話をしながら、母は涙を流していました。ぼくは、母親が泣く姿というのをあまり見たことがなかったので、「なんで泣いてるの？」と聞きました。そうしたら、母にとって当時のぼくは「娘」ですから、「そのお姉さんとあんたが重なって涙が出てきたんや」と言いました。そして、部落差別によって命を絶ってしまった女性のことを詳しく話してくれました。その時、ぼくは、「わたしは、そのお姉さんみたいに死なないよ。わたしは大丈夫やで」と答えました。



母の話聞いて「おかしいやん」と子どもながらに思いました。「なんで同じ人間やのに、ただそこに生まれたというだけで好きな人と結婚ができないの？ そんなことで周りから反対されるなんておかしい」という気持ちも、小学校低学年であったぼくのなかにもしっかりありました。だから、そのときの母親の話を今でも覚えているし、そのころから、自分の育ったムラに対して卑下したりしないで、「部落差別はおかしい」と言える自分になっていきました。そして同和教育・人権教育のなかで育ったぼくは、「多くのおとなに愛されている」と感じていました。

2 だれにも言えない三つの秘密

そのようなぼくでしたが、だれにも言えない秘密が三つありました。

一つ目は、自分は女の子として生まれているのに、「おちんちん」が身体にあることを想像しながら生活していたことです。二つ目は、両親がつけてくれた名前ではなく、当時はやっていた「キャプテン翼」という漫画から「つばさ」という名前を自分につけていたことです。そして三つ目は、自分は女の子として育てているのに、女の子のことが好きだったことです。

この三つのことは、誰かに「決して言ってはいけないよ」と言われたわけではありませんでした。ぼくのなかで「これは絶対に他人には言ってはいけないことだ」という確信がありました。それは、小学校で受けた授業が大きく関係しています。図や絵を用いて、性差による体つきのちがいや、いつか異性を必ず好きになって家族ができていく…という授業でした。しかし、自分はそこには当てはまりません。こうした授業からも「どう考えても自分はおかしい」と思うようになっていきました。家庭では女の子として、また姉として育てられてきたことによって、「やっぱり自分は変だ。自分みたいな人は、この世に一人しかいないにちがいない」と思っていました。だからこの三つのことは、大好きな父や母、またきょうだいや友だち、そして先生にも絶対に言えないぼくの秘密でした。

3 自分のセクシュアリティ ～“ありのままの自分”と向き合いながら～

自分がおかしいのではないかというのを感じ始めたのは小学校5年生くらいからでした。それを隠すために、今ふり返るといろんなことをしました。そのころ、休み時間に野球をするのがはやっていました。いわゆる男の子が野球をして、それを女の子が応援するというものでした。ぼくは「男」とか「女」とか関係なく、単純に野球をするのが好きでした。ぼく以外にも二人の女の子が男の子にまじって一緒に野球をしていました。でも、もう一つぼくには別の喜びがあったんです。男の子に混じって野球をしていると、それを見ている女の子たちが「キャーキャー」と応援してくれます。自分も男の子と同じように「キャーキャー」言って応援されているような感覚を味わっていました。それは、男の子として自分のことをみてもらえているような感覚です。でも、もちろん、そんなことは友だちには言えませんでした。常に自分のなかにある本当の気持ちは外には出せませんでした。自分の部屋で「つばさ」という名前前で過ごしていても、部屋を出ると父と母がつけてくれた名前前で過ごします。そうやってスイッチを切り替えながら生きていました。

中学・高校と進むにつれて、スイッチを切り替える必要がある場面がどんどん増えていきました。それはなぜかという、いろいろなことで男女分けがはっきりなされるようになるからです。例えばこんなことがありました。中学生の時の水着販売でのことです。時間割の都合で体操服を着ていたぼくが、友だちと一緒に販売業者のところへ水着を買いに行きました。「2年〇組の田中です。M サイズください」と言いました。そしたら、当時ボーイッシュな容姿だったぼくに、業者の人が男子用の水着を渡してくれたのです。そのとき、正直心のなかではめちゃくちゃ嬉しかったのですが、隣にいた友だちには「ちょっと、これ、どう思う？ わたし、女やっちゃうの」と言ったんです。本当の気持ちをわざと逆の言葉で友だちに伝えて、自分が「おかしい」と思われないようにしたのです。さらに、家に帰って同じように「こんなことがあってん。どう思う？」とわざわざ母にも言いました。すると母は、「かわいそうに。あんた女の子やのにな」と言いました。ぼくは、「自分が男の子に間違われてうれしい」という気持ちを少しでも知られまいとそんな行動をとっていたのです。なので、母や父、そしてぼくの周りの人がぼくの気持ちに気づくはずがありません。女の子として育てられてきた自分は、大きくなればなるほど「友だちや親には知られてはいけない」と思い、このように本当の気持ちに蓋をして生きてきました。

4 保育士になって

自分は生い立ちのなかで、部落差別がおかしいということは当たり前感じていましたが、これまで出会ってきた友だちのなかには、本当に「部落はこわいところだ」と思っている人もいました。なんでそう思っているのかと話していくと、みんな身近なおとなに教えられていることがわかってきました。親や周りの人に「怖いところ」と聞かされたと言うのです。子どもは自分が生きる環境を選べないなか、どのような環境でどのような教育を受けて育つのかはものすごく重要なことだと思いました。それで小さい頃から育まれる人権感覚に興味をわき、子どもが大好きだったこともあって、保育士をめざすようになりました。その後進学し、保育士となって初めて赴任したのが豊中市の地域に被差別部落のある保育所でした。4月の子どもの姿から3月の子どもの姿までの見通しをもち、仲よしの段

階から決めつけを克服する段階へと子どもを育てることをめざして取組をすすめている保育所でした。そこで特に大切にされている取組として、クラス全員分の誕生会を必ずするというものがありました。自分が担当した4歳児クラスで誕生会に取り組むなかで、子どもたちがぼくの誕生会もしてくれると言い出してくれて、母に誕生日のメッセージを書いてもらうことになりました。その時に母が書いてくれた文章です。

初めての子ですごく嬉しかった。嬉しい気もちと同時に、これから先、この子が部落差別を受けるかもしれないと思うと、責任を感じました。私はおにいちゃんとおとうとの三人きょうだいで育ちました。女きょうだいがほしかった。だから、女の子が生まれてとても嬉しかった。一緒に買い物に行ったりしたいなと思った。

母の手紙には、「部落差別」という言葉が書いてあったので、子どもたちはすぐに「部落差別ってなに？」と聞いてきました。ぼくなり、子どもたちにわかるように住んでいるところを理由に差別されることを説明しました。子どもたちは「なんでなん！」「そんなんおかしいやん！」とすぐに言っていました。子どもたちには、おかしなことに「おかしい」と感じられる感性がしっかりあり、だからこそ正しく教えることの重要性をそのとき改めて感じました。

ただ、手紙の後半の「女の子が生まれてとても嬉しかった」という言葉にぼくはショックを受けました。母親がそう思っているのはもちろん知っていたつもりでしたが、改めて「やっぱり女の子としてしか生きられないんだな」とか、「ぼくはぼくを生きていけないんだな」などと思い、それ以降“ありのままの自分”にどんどん蓋をしていきました。ふり返ってみると、幼児のころから社会人となり勤め始めるまで、「女の子として生まれたから女の子として生きる」「外性器が女の子だから女の子として育つ」「女の子として男の子を好きになるのが当たり前」というのをずっと刷り込まれながら生きてきたように思います。

5 自分が100%でいられる人との出会い

その保育所に近藤さん(以下:彼女)が異動してきました。それまでにも研修会などでは顔見知りの仲で、色々な取組を報告し合ってきたのですが、同じ保育所で勤めるのは初めてでした。彼女の保育ですてきだなと思うところは、子どもが見せるどんな姿も受け入れるところでした。

とても印象に残っている出来事があります。彼女が5歳児をもっていた時のことでした。力の強さや口調の荒さから、ついつい「こわい子」と決めつけられていたYがいました。子どもたちどうしの決めつけにYは悔しさを感じていましたが、子どもたちだけではなく、実はおとなのなかにもYへの決めつけがありました。ある日、ベテランの保育士が園庭に落ちていた棒を拾って歩いているYを見かけます。そしてYに「またそんなんもって。なにしてんの！」と怒ったそうです。事務所にいた彼女のところにやってきたYは、「ぼくは何もしてないのに。すごいいややった」と話しました。すごく悔しそうに話すYに、彼女は「何もしてないのにそんなん言われたらいややな。あたしが一緒に言いにくいかな？」と言って、

Yと一緒にベテランの保育士のところに話しに行きました。ぼくは、そこまで子どもの側に立ちきる彼女の保育をすごいと思いました。そして、同時に、「この人、すてきやな」と思いました。そして、その気持ちを彼女に伝えたいと思い、「あなたのことが好き」「あなたの保育がすてきやなと思っている」ということを素直に伝えました。そしてその後、24年間誰にも言えなかったぼくのセクシュアリティについても、自然に彼女に話していました。これまでずっとひとりで考えてきたことを、彼女にただただ聞いてほしいと思い、一生懸命話していました。

ぼくの話聞いて、彼女は、「しんどかったんやな」と言ってくれました。そして、具体的に色々なできごとがあったことに対して「そのとき、本当はどんなふうに思ってたん？」と一つひとつ丁寧に聞き返してくれました。そして最後に、「今、いちばんしたいことは何？」と尋ねてくれました。思いもしなかった問いかけに、自分でもそんなことを言うとは思っていませんでした。ぼくは「男性物の下着を身に着きたい」と答えました。今でも「なんであんなこと言ったのかな」と思うのですが、心の奥底ですっと望んでいたのだと思います。そして彼女は、「明日、買いに行こう」と言ってくれました。そして次の日、初めて男性物の下着を二人で買いに行きました。

今まではタンスのなかに着たい服はあるけれども、同時に着たくない女性ものの服も入っていました。でも、彼女と一緒に過ごすようになってからは、タンスのなかには自分の着たい服だけが入っているようになりました。それはすごく嬉しいことでした。自分に対する呼び名も変わってきました。これまでは自分のことを言うとき「うち」とか「自分」を使っていましたが、彼女の前では「ぼく」とか「おれ」と言えるようになりました。好きな言葉で話し、好きな服を着て、自分の身に着きたい下着を身に着け、好きな人に好きと言えることがこんなにも幸せなんだと実感しました。

すると、別の問題がおこってきました。ありのままの自分を出せる場所がひとつできたことで、逆にありのままの自分でいられない場所が、これまで以上にしんどくなってきたのです。職場で仕事をするのも、家での毎日の生活を送るのもしんどくなってきました。

ちょうどそのころ、「3年B組金八先生」というドラマがやっており、いわゆる「性同一性障害」という言葉を初めて知りました。ドラマの中で生徒が「ぼくは女じゃない、男だ！」と訴えたセリフを聞いて、すごく衝撃を受けたのを覚えています。さらにその同時期に、競艇選手で女性として登録していた人が男性として登録し直すというニュースの記者会見を偶然見ました。ドラマの中の話ではなく現実の話に出会い、「自分はおかしくないのだ」「自分以外にもそういう人はいるのだ」「ひとりぼっちではないのだ」と感じられるようになっていきました。そして、ぼくみたいな人たちのことをもっと知りたい、「性」について知りたいと思い、「性」とは何かを二人で調べる日々が始まりました。

6 「性」とは何かという問い

みなさんは、「自分の性別は何ですか？」と尋ねられたら、どう答えますか？きっとほとんどの人がすぐに答えられ、隣に座っている人もすぐに答えられるだろうと思っているのではないのでしょうか。わたしも聞かれたら「女です」と答えます。でも、「なぜ、女なのですか？」と問われたら、立ちどまって



しまいます。「女」として生まれてきても「男」だと思っている人もいますので、何をもって「女」なのだろう、「男」なのだろうと考えると、わからなくなります。

そこで、人の性を4つの要素から考えてみたいと思います。

①身体の性

性染色体、外性器・内性器の状態、ホルモンなどの要素によって決められる性。

赤ちゃんが産まれた時にすぐに性別を言われることが多いと思いますが、なかには性分化疾患といって、性器など身体では性別が決められない人がいます。

②心の性

自分自身の性をどのようにとらえているかということ。

自分が何者かということとどのように思っているのかということ。 「女です」という人もいれば、「男です」という人もいれば、「自分の性がわからない」という人もいます。また、「男と女と両方あるような気がする」という人もいます。

③社会的な性

身体の性にかかわらず、成長過程・社会生活のなかで後天的に身につけていく性のこと。「男らしさ」や「女らしさ」などの性別役割や、服装やふるまいなどの性別表現など。

以上が自分のなかにある3つの性の要素です。そして4つめの要素として次のものがあります。

④好きになる性

恋愛や性愛の対象となる性別のこと。

同性が好きな人もいれば、異性が好きな人もいれば、どちらも好きな人もいます。また、恋愛感情をもたない人もいます。

ここで、わたしのセクシュアリティを見てもらおうと思います。見た目では性はわからないし、女と男って単純に分けられないなということで、この横軸をつかって表すことで自分が今どこにいるのかなということを伝えたいと思います。

おとこ	〔身体の性〕	おんな
おとこ	〔心の性〕	おんな
おとこ	〔社会の性〕	おんな
おとこ	〔好きになる性〕	おんな

4つの性の要素について、自分の当てはまるところに印をつけてみましょう。すべてが端につくとは限らないのではないのでしょうか。



わたし(近藤さん)自身のセクシュアリティで言うと、「身体の性」も「心の性」も「社会的な性」も女であることに違和感はないですし、多くの人はこの3つが一致していて当たり前だと思っているのだと思います。しかし、なかには「身体の性」がはっきりわからない人や、「身体の性」と「心の性」に違和感をおぼえる人、心の性別がどちらかはっきりしない人などがいたりもします。そう考えると、性は「男」か「女」の2つだけではないなと思います。

身体の様子ではその人の性は決まらないし、隣にいる人の性も決めることはできません。ましてや目の前の子どもの性を決めることもできないはずです。性はいろんな視点からとらえられるものであり、ここにいる人みんなでこの表をつけてみると、10人いれば10通りのセクシュアリティがあります。まさにグラデーションで、どちらか一方に、勝手に決められるものではないという認識に立っていただければと思います。



「性のありようは多様です」

- ・心の性（性自認）や好きになる性（性的指向）は、教育やしつけでは変わらない
- ・性別の認識がない人もいる
- ・ちがいを否定しないこと。どんな性もOK！
- ・見ためで勝手に決めない（見ためではわからない）

7 カミングアウト

ありのままの自分を偽っている自分、つまり一番嫌いだった自分のことを知っている人たちに囲まれて生きていくことは、すごくつらいことです。ここから逃げ出し、自分のことをだれも知らないような場所でひっそり生きようかと思うこともありました。でもぼくは、自分の周りの人たちが大好きだから、自分のことをちゃんと知ってほしいと思うようになりました。

あるときに、地域の仲間が結婚差別に遭ったことをきっかけに、結婚差別についての劇をすることになりました。そこで男子と女子に別れて配役を決めることになりました。その時、ぼくはすでに彼女と出会っていましたが、「男の人として生きたい」と強く思っているときだったので、お母さん役や当事者の女の子の役はどうしてもやりたくありませんでした。でも、大切な仲間のなかでも、その気持ちを言うことはできませんでした。その時は、役を取らず、音響の係をしました。みんな仕事が忙しいなか、毎晩集まって劇の練習をしたのですが、役がある人は台詞も覚えなといけませんから、とてもたいへんです。ぼくも本当は一緒に演じたいという気持ちがありながら、やれない理由も言えず悶々としていました。でも伝えたい相手はいました。子どものころから何でも相談したり話し合ったりしてきた親友と、その親友の夫です。ある日の練習の帰りに、ついにその友だち夫婦に、ぼくがずっとかかえていた秘密と彼女(近藤さん)との関係を話す決心をしました。ぼくにとって、これまで部落問題を共に考えてきた仲間に自分のセクシュアリティのことをカミングアウトすることは、今まで感じたことのないよう

な緊張感があり、とても勇気のいることでした。「受け入れられなかったらどうしよう」という不安と「大事な友だちだからちゃんと聞いてほしい」という気持ちが入りまじり、30分くらい「あのな・・・」「あのな・・・」とくり返すばかりで何も言い出せませんでした。やっと話し始めることができ、これまでのことを長い時間をかけて聞いてもらいました。

ぼくは以前に「女としてしか生きられない」と思い込んでいたしんどい時期があつて、その頃は、はきたくもないスカートをはき、髪をのばして化粧をしていました。友だちはそのときのぼくのことを思い出して、「化粧して、髪の毛伸ばし始めたあんたの姿を見て、やっと「女らしく」なってきたってわたしは喜んでた。でも、その頃がいちばんしんどかったんやな・・・」と泣きながら言ってくれました。改めて自分のしんどいことをわかってくれる友だちの存在の大きさを感じました。そして、友だちは多様な性のありようがあることも以前から知っていたと話してくれました。朝まで語り明かし、これまでは“ありのままの自分”を100%出せるのは彼女(近藤さん)の前だけだったのが、これからはさらに二人増えたことが嬉しくてしかたがありませんでした。しかし、ぼくが“ありのままの自分”でいられる場所ができるのに、ものすごく時間がかかっています。彼女と出会ったのが17年前。二人の友だちに話したのが10年ほど前。“ありのままにいられる”ということは、すごく当たり前のことのはずなのに…。友だち夫婦に話してから、段階を経て、きょうだいに、そして親に、ぼくたちのことを伝えていきました。

8 正しく出会うことの大切さ (一歩さんより)

被差別部落の出身であるということは一度も否定したことがないし、いやだなと思ったこともないのに、セクシュアリティについては、どうしても「自分がおかしい」という感覚から抜け出せないでいました。「そうではない」と思えるまでには、ずいぶんと長い時間がかかりました。どうしてそんなちがいがあつたのかと考えていくと、ひとつ思い当たることがあります。それは、部落差別については小さい頃から「こんな不当な差別はおかしい」と周囲から伝えてもらっていたのに対して、セクシュアリティについては、だれからも多様な性があることについて伝えてもらっていなかったということです。私の親は、まさか自分の子どもが心と体の性が合致しないだなんて思わなかつたらうし、そもそも性に多様性があることも知らなかつたでしょう。小さい頃から多様な性に出会っていれば、ぼくは、もっと早くから自分らしく生きることができていたのではないかと思います。「自分をおかしいと思わなくていいんだ」「性は多様なんだ」と知っても、ずっと「自分はおかしい」と思っていた自分の意識を変えられない日々が10年近く続きました。自分を受け入れられないしんどさを感じると同時に、受け入れられない社会に問題があるとも思いました。この社会の中で、ぼくのような人が生きていくのはしんどいことなんだということを長い間感じてきました。それはきっと隣でぼくを見守ってくれていた彼女も感じていたことと思います。

(近藤さんより)

私は、保育士として、子どもたち一人ひとりが誇らしく生きられるよう、同和保育をすすめてきたつも

りでした。でも、子どものあるがままを受け入れると言いながら、無意識のうちに「男の子の〇〇ちゃん、そのままがいいよ」「女の子の〇〇ちゃん、あなたのそのまま、すてきやね」と言って保育をしてきたように思います。与えられた名簿で決めていたのか、自分の中にある「当たり前」の意識から決めていたのか、勝手にその子の性を決めていたなと思います。「そんなふうに決めつけられたら、わたしはそのままであらねん」と思っていた子がいたかもしれないなと今は思います。性を決めつけなくて、子ども一人ひとりのそのままを「ありのままがいい」と受け入れなければ、一人ひとりの人権を本当に守るということにはならないのではないかと思います。

彼と電車に乗っていると、よくヒソヒソと「あの人って、「男」やと思う？「女」やと思う？」というやりとりが聞こえてきます。わたしたちとは何も関係のない人たちが、わたしたちの性を決めつけようとしている。「男」か「女」か、どっちかに決めたいがる意識をつくづく感じます。また、外出先では、トイレも重要な問題です。私は朝外出して夜帰宅するまで、トイレの心配をすることはほとんどありません。でも、彼の場合はちがいました。男性用のトイレに入ることはドキドキするし、かといって女性用のトイレに入ることもできず、結局外出先でトイレに入らずに我慢して家に帰ってくることもありました。トイレの問題は健康にかかわる重大な問題です。いまでこそ「誰でもトイレ」のような多目的トイレが町に増えてきましたが、そのことでトイレを我慢する人が少なくなるとういなど思っています。

性のことも部落差別のことも、正しく知ることが人権感覚を育てることにつながるのだなと改めて感じています。

お話のさいごに、一步さんが「自分を自分らしく生きるために決めているルール」を紹介していただき、その後、参加者どうしで講座を受けての感想などを交流しました。

【絵本】じぶんをいきるためのルール。 田中一步:著

一步さんが自分を大切に生きるために決めている6つのルール。“あたりまえ”とされるルールのなかで息苦しい日々をすごしている子どもたちに、「おかしくなんかないよ」「ひとりじゃないよ」と伝えたい。すべての子どもに「“じぶん”でいいんやで」というメッセージを伝えたい。そんな一步さんの思いが込められています。



【参加者から】

- ・ テレビなどで聞いたことがあったけれど、他人事のように思っていました。おとなの決めつけで、子どもたちがつらく感じてしまうことがあると知り、自分の考えや言葉がけ、かかわり方などを考えることが大切だと思いました。
- ・ あらためてふり返ると、それぞれ話すときに「私は別にそういう



のじゃないんですが（マイノリティ）」「私の娘が女の子なのに」といった言葉が自然と出ていました。「自分自身はちがう」「自分の子はちがう」といった思いというのは、自分も含めてやはりあるのかなと感じました。こういうことから、自分も“マイノリティ”を生み出す社会の一員であることを実感しました。

- ・講座を受け、当たり前の声かけで苦しむ人もいるという言葉聞き、髪の短い友人に「なんで（女の子やのに）髪のばさんの？」と声をかけていた自分にドキリとしました。まずは自分自身の身近なところから性について考えていきたいと思いました。
- ・自分の子どもからいざカミングアウトされたときにどうするのか…ということを考えながら聞いていました。自分の子どもたちにも、“自分の着たい服”を着させたいと思いました。
- ・見た目や決めつけで、言葉がけをしていた自分がはずかしいと思いました。日常生活のなかで、当たり前を変えていける自分になりたいです。

